

二居より平標沢



1983. 4. 9 (日) (曇)後小雨

越後湯沢の始発バスを二居で下車したのは総勢15名で、我が会が14名にもう一人若い単独行の男性が加わっていた。最初は顔の知らない新人かと思っていたが、後で聞いてみると、平標山へ行く予定だったが、大勢が降りるのにまどあされて一緒に降りてしまったということだった。

センノ沢出合の先まで林道は除雪されていた。堰提の手前でシールをつけ、猿田、石垣、蔵田、白沢の4名はセンノ沢より平標山をめざし、残り9名は一ノ肩から日白山へのびる尾根に登り一ノ肩付近で合流することになった。迷いこんできた単独行者も我々のルートについてきた。1073mの尾根の末端をまわりこみ、開けた雪原に出る。やがて、右手に樹林帯を抜けた4名の姿が見えた。正面左手の沢が上部まで雪が積りそうなので、そこを登ることにした。樹林を抜けると沢はスリ鉢状に開け、右に大きくカーブしながら高度を上げていく。源頭付近は30度を超える急登だったが、そのままシールで登りきり、支尾根に出る。ここからはつぼ足に代え、主稜線をめざす。30分程でカンバコキ沢源頭のコルに出た。

一ノ肩への稜線は、幅はあまりないが、スキーにはやっかいな波状のコブは少なかった。西の方角より雲が広がってきたが、視界はまだ良好で、滑るまでは何とか持ちそうである。しばらく進むと山頂付近に人影が見えた。人

数から猿田氏のパーティだとわかり、ストックを振って答える。一ノ肩の下1800m付近で合流した。

強い風を避け木の陰でしばらく休んだ後、全員そろって平標沢の中央部に滑りこむ。上部の大斜面は、斜度、広さとも申し分なく、豪快な滑りが楽しめる。ただ今回は、雪質があまり良くないのが残念だった。中間部あたりで猿田氏の新品のロシニョールが真中から折れるというアクシデントがあったが、何とか最後まで滑ることができた。仙ノ倉沢は例年より雪が少ないため、左岸へ渡ることがで

きず、群大ヒュッテ前の傾いたつり橋を一人ずつ慎重に渡って対岸へ移る。雪の残り少なくなった毛渡沢林道をスケーティングで滑り、土樽へ出た。 [記.長谷川淳一]

タイム：二居 6:40 — 堰提手前 7:00/7:30 — 支尾根 8:50/9:15 — カンバコキ沢コル 9:50/10:10 — 一ノ肩下部 11:20/12:00 — 群大ヒュッテ 13:35/14:00 — 土樽駅 15:20

メンバー：L.菅沼, 伊藤(碩), 長谷川(淳), 重田, 角田, 栗屋, 手塚, 川上, 長谷川(正), 佐藤 / 猿田, 蔵田, 白沢, 石垣(センノ沢パーティ)

